

エダマメ

栽培のポイント

- ・生育適温は25〜28℃で、高温にはよく耐えます。しかし、低温や霜に弱く、13℃以下の低温になると空菜が増えます。
- ・莢着きが悪くなるので、開花期から結実期に乾燥させない。
- ・根には根粒菌が付着し、空気中の窒素を固定・利用するので、他の野菜ほど肥料を必要としない。肥料が多すぎると、徒長して着莢率・結実率が低下するので注意する。

- ・発芽時のハト・カラスの食害に注意する。

栽培管理

①育苗

エダマメ栽培には移植栽培と直まき栽培があります。

4月下旬まきでは1aあたり400〜500ml、5月以降の播種では300〜400ml種子が必要である。

移植栽培では、育苗箱に土を深さ10cm程度入れ、これに6cm間隔のまき溝を作る。

2cm間隔で播種し、1〜2cmの覆土をして十分かん水する。

発芽まで床面が乾燥しないように新聞紙をかけておきましょう。

5〜10日で発芽するので、発芽し始めたら新聞紙を取り除く。

②畑の準備

連作でない畑を選び播種または定植2週間前に、1aあたり完熟たい肥100kg、粒状苦土石灰10kgを投入して耕起します。播種・定植の1週間前に大豆専用化成4kgを施して整地してください。

肥料が多すぎると、莖葉が過繁茂になって莢が少なくなるので、前作の施肥残効が予想される時は、基肥は無肥料または少量施肥とし、生育状況に応じて追肥する。

マルチ被覆は適当な降雨後に行い、乾燥している場合はかん水を行った後に被覆する。

③播種、定植

移植栽培の定植苗は、播種後20日前後の本葉1.5枚程度（子葉の次に出る「初生葉」は含めない）が適期である。

・幅幅90cm、条間30cm〜40cm、株間20cmの2条植えで、2本ずつ植える。

・定植は、温暖無風の日を選び、子葉の近くまで土に埋まるようにする。

・直まきする場合は、1ヶ所に2粒ずつ、2cmくらいの深さに播種する。

・発芽時にハト・カラスの食害を受けやすいので、播種後、寒冷紗・不織布などのベタがけしておくとう良いでしょう。

・ハト・カラス害や発芽不良に備え育苗箱を育苗箱などに播種しておき、欠株が生じたときは本葉1枚ころまでに補植する。

④中耕・土寄せ・追肥

定植20〜25日後に除草を兼ねて1〜2回中耕・土寄せする。

土寄せは台風などで倒伏するのを防ぎ、排水を良くするために必ず行う。土寄せは追肥を兼ねて行う。

⑤かん水

エダマメの根は浅根性のため乾燥に弱い。

特に開花期から結実期に乾燥すると落花しやすく、着莢率が低下するので、乾燥しないようかん水する。

また、収穫間近になったらかん水量を多くし、子実の肥大をはかる。

⑥収穫

開花後40〜50日ごろから子実が肥大し、莢を押さえると子実が飛び出すころが収穫適期である。収穫期間は短く、7〜10日間であるので過熟にならないうちに収穫しましょう。

収穫量が多いときは冷蔵庫で貯蔵してください。

⑦害虫

害虫では、カメムシ類・シンクイムシ類・ハスモンヨトウが発生しやすい。カメムシ類は発生初期に薬剤防除し、シンクイムシ類は莢ができて始めたころに薬剤防除してください。

ハスモンヨトウは、ふ化幼虫が葉裏に群生して食害し、上位の葉が「白化葉」になります。幼虫が大きくなると莢も食害するようになるので、発生を見逃さず幼虫が群生している葉を切り取って処分してください。

病害虫 シリーズ

うどん粉病

被害の症状

うどん粉病はウリ科の野菜をはじめ、多くの野菜に発生する、「菌糸状のカビ」が原因のやっかいな病気です。

うどん粉病の代表的な症状ですが、初期症状は、野菜の葉にうどん粉（小麦粉）をまぶしたような白色の病斑がポツポツと現れ、症状が進行すると葉全体に広がっていきます。その後は茎にも蔓延し、果実やヘタの部分にも症状が広がって苗の生育が悪くなり、最後は株全体が枯れてしまいます。

防除方法

初期の頃は発症する葉数が少ないのでうどん粉病にかかった葉を摘み取ることで対策は出来ますが、株全体に広がり始めたら、株ごと除去するしか手立てはありません。植えた株数が少ない時は、株ごと抜き取るわけにはいきません。被害が広がる前に治療薬を利用して蔓延を防ぐことが大切です。生育初期や収穫前なら決められた量と決められた回数を守って治療薬を使用すれば人体への影響も少なく済みます。窒素肥料を控えることで予防できます。

・葉が茂り過ぎないように摘葉をしっかりとする。

・発病したら葉や果実を早めに摘み取りましょう。

・抵抗性のある接木苗を利用すれば予防になります。

・灌水時の泥の跳ね返りを防ぎましょう。薬剤については、JAでお尋ねください。



キュウリの葉に発生したうどん粉病



イチゴの葉に発生したうどん粉病